

## 平成31年（令和元年）院内集談会（2019）

No		演 者	演 題	発表日
1	リウマチ科	岸本 勇二	リウマチセンターにおけるチーム医療の取り組み	2019.02.06
2	臨床工学技術課	萩原 隆之	ハイフローセラピーの紹介	2019.02.06
3	看護部	田淵 裕子	特定行為「インスリン投与量の調整」活動報告	2019.02.06
4	看護部	近藤 照代 (5西病棟)	腹膜透析患者への看護支援 ～退院後訪問の取り組み～	2019.02.06
5	臨床工学技術課	大村 晋悟	平成30年度呼吸ケアサポートチーム（RST）活動報告	2019.06.06
6	看護部	小山 和子	鳥取赤十字病院における特定行為研修について	2019.06.06
7	看護部	濱本 良恵 (7西病棟)	特定行為「創傷管理」活動報告	2019.06.06
8	看護部	濱本 奈未 (5西病棟)	広島大学病院見学を終えて	2019.06.06
9	臨床工学技術課	長谷 知哉	当院で使用している酸素療法器具の紹介	2019.10.10
10	歯科口腔外科	谷尾 和彦	薬剤関連顎骨壊死（MRONJ）について	2019.10.10
11	整形外科	岸 隆広	「骨粗鬆症治療推進委員会」の立ち上げ	2019.10.10

## 1. リウマチセンターにおけるチーム医療の取り組み

リウマチ科 岸本 勇二

近年、関節リウマチ診療は早期診断の重視や、治療戦略の確立、生物学的製剤など有効性に優れた薬剤の登場により、長足の進歩を遂げた。一方、その診療内容は専門化、複雑化の一途をたどっており、そのため、医師単独の診療から、さまざまなメディカルスタッフが介入するチーム医療へとシフトすることが望まれている。2016年4月にリウマチセンターを開設した当院でもリウマチ診療チームを構築し、看護師による診察前評価やフットケア、薬剤師による薬剤の副作用説明や自己注射指導、理学・作業療法士による関節保護指導や自助具紹介、医療社会福祉士による心理・社会的な問題の相談・調整など、各スタッフが専門性を活かした治療介入を行っている。また患者説明用パンフレットを自作し、患者教室を定期的に開催するなど患者教育にも力を入れている。チーム医療により質の高い医療を提供しつつ、今後は院外との連携（病診連携）を推進していきたい。

## 2. ハイフローセラピーの紹介

臨床工学技術課 萩原 隆之

### 【はじめに】

ハイフローセラピー（HFT）とは、酸素/空気ブレンドと加温回路を用いて加温加湿された高流量のガスを経鼻カニューラにて供給する呼吸療法である。

### 【HFTの効果】

1) 加温加湿された酸素・空気による繊毛機能改善効果 2) 正確な吸入酸素濃度の供給 3) PEEP効果 4) 解剖学的死腔の洗い出し効果 5) 患者QOLの維持

### 【適応と禁忌】

上記の効果から、HFTは従来の酸素療法とNPPVの中間に位置づけられる。しかし、積極的な換気補助はないため、II型呼吸不全への適応は軽症患者に限られる。また呼吸停止、意識障害、気道閉塞した患者には禁忌である。

### 【当院での現況】

平成28年度診療報酬改定にて「ハイフローセラピー」の区分が新設、平成28年12月より『F&P社製 AIRVO2™』の臨床使用を開始した。保険点数は1日につき192点が算定可能である。現在、臨床工学室に1台レンタルで常備、必要があれば追加レンタルを行っている。平成28年12月から平成30年12月までの平均稼働率は42.5%、レンタル台数は36台である。

### 【まとめ】

HFTは、患者にとって不快感が少なく協力が得やすいなどメリットは多い。しかし、明確な適応条件および疾患がなく、酸素療法やNPPVとの使い分けを検討していく必要がある。

## 3. 特定行為「インスリン投与量の調整」活動報告

看護部 田淵 裕子

今後の在宅医療等を支えていく看護師を計画的に養成していくことを目的とし、特定行為に係る看護師の研修制度が創設された。38行為21区分の特定行為がある。栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連、血糖コントロールに係る薬剤投与関連について研修を終了した。医師または歯科医師が患者を特定した上で、看護師に手順書により特定行為を実施するように指示を出した患者に特定行為を行うことができる。

特定行為インスリン投与量の調整実施後の反応として、患者は、納得して実践し、検査データが改善し、患者自身が自分の血糖値に関心をもって取り組むようになった。また、施設や患者からの電話相談などで医師の外来診療を中断することが減り、医師の外来診察時間が短くなり外来の診療時間が短縮した。

今後も臨床推論、病態判断を用いたアセスメントを行い、医師とカンファレンスを行い評価してもらうことで特定行為の質の向上に努めていきたい。

## 4. 腹膜透析患者への看護支援～退院後訪問の取り組み～

5西病棟 近藤 照代

末期腎不全に至り腎代替療法が必要となった際、患者がその人らしく生きることができるとを目標に、患者・家族へ意思決定支援を行い治療方法を決定している。

A病院では腹膜透析（PD）も行っており、昨年の導入件数8件、最高導入年齢は93歳であった。PDは血液透析と異なり、在宅医療であるため、自宅での自己管理、生活環境が治療結果に大きく影響する。また年々PD患者の高齢化が進んでおり、家族の協力が不可欠な状態にある。

患者の在宅医療を支援するため、平成28年度より退院後訪問指導を開始した。この期待効果として、腹膜炎発症率の低下、訪問看護師と病院の連携強化、在宅状況をふまえた患者指導、看護実践の評価と改善、訪問後のフィードバックによるスタッフのモチベーションアップがある。

実際に入院中の指導方法の問題も明らかになり、改善

することができた。今後も退院後訪問指導を積極的に行い、患者・家族の在宅医療を支援していきたい。

## 5. 平成30年度呼吸ケアサポートチーム（RST）活動報告

臨床工学技術課 大村 晋悟

〈活動目標〉

①メンバーラウンド参加率、RSTラウンドの向上②NPPV装着患者の皮膚トラブル0③研修会の実施④RSTラウンドデータベース知名度アップ

〈活動内容と成果〉

患者統計：人工呼吸器装着患者数132名、平均装着日数4.7日離脱率：76.9% RST加算取得4名①当番制にすることでラウンド回数は50回と例年以上となった。しかし、当番表を有効活用できず、メンバーに偏りが見られた。②初めてNPPVによる皮膚トラブル0となった。NPPV平均装着が3.7日で、例年の皮膚トラブル発生日数を下回ることができた。③計7テーマの研修会を実施した。④RSTラウンドデータベースは10件に留まった。

〈まとめ〉

RST活動を行って来て初めての皮膚トラブル0となった。チームで連携し早期離脱へ向けた取り組みが、離脱率につながり平均装着日数が短縮でき皮膚トラブル0になると考える。今後も、RSTメンバー全員の協力は勿論だがメンバー以外の多職種とも連携し早期離脱に向けた活動を続けることで、院内の質の向上に貢献する。

## 6. 鳥取赤十字病院における特定行為研修について

看護部 小山 和子

看護師特定行為とは、診療の補助であり、高度かつ専門的な知識及び技能が特に必要とされる行為で、38行為・21区分が「特定行為」として定められている。この特定行為を実施する看護師を養成するのが、「特定行為研修指定研修機関」で、鳥取県内では鳥取大学に次いで2番目となる。

鳥取赤十字病院では当面の間、5区分を取得できる区分としている。

特定行為研修を受けた看護師は、医師・歯科医師があらかじめ作成した手順書（指示）によって、タイムリーに特定行為を実施することができるようになる。

特定行為研修を修了すると、情報収集・アセスメント・看護計画・実施の一連の看護活動のいずれの場面でも、臨床推論・病態判断力が強化され、タイムリーなケア実施による症状緩和・重症化予防が期待されている。

特定行為研修は、今後の急性期医療から在宅医療等を

支えていく看護師を計画的に養成することを目的としており、当院でも計画的に養成していく予定である。

## 7. 特定行為「創傷管理」活動報告

7西病棟 濱本 良恵

超高齢社会に向け看護師の役割をさらに発揮できるように、保助看法が一部改正、医師又は歯科医師の判断を待たずに手順書により一定の診療の補助を行う「特定行為に係る看護師の研修制度」が開始された。

筆者は、創傷管理関連（創傷における壊死組織の除去、創傷に対する陰圧閉鎖療法）、創部ドレーン管理関連、栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連（持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整、脱水症状に対する輸液による補正）の3区分5行為の研修を修了、2018年3月より特定認定看護師として特定行為を実践している。間の実践報告をする。

1年間で壊死組織の除去は外来9件・病棟66件・計75件、陰圧閉鎖療法は外来2件・病棟8件・計10件、介入した。

1人の患者に複数回介入するため、述べ件数としては、外来46件・病棟285件・計331件で、1日当たり約2件の特定行為を実践した。

実施病名は、両特定行為とも褥瘡・下肢潰瘍・術後創の順で多い。

実施の成果として、今まで週1回の褥瘡回診や皮膚科診察を待たなければならなかったが、タイムリーに介入することで、創傷治癒過程が促進され、早期治癒・早期退院・在宅での管理が可能となった症例も増えてきている。

また、医師が処置に介入する頻度・時間が短縮できることで、医師は診察やより高度な処置へ時間を要することができている。外来患者に対しては、スキンケア外来で処置することで、患者の待ち時間の短縮・医師の外来診察のスムーズ化にも繋がっていると考えられる。

今後は、在宅や地域施設へと活動範囲の拡大を図り、住み慣れた地域で安心して生活が継続できるよう、特定認定看護師として活動していきたいと考えている。

## 8. 広島大学病院見学を終えて

5西病棟 濱本 奈未

心不全パンデミック到来と言われている昨今、当院でも鳥取県東部地域急性期病院として多職種とどう連携しながら包括支援を行っていくのか考える必要があった。広島大学病院心不全センターは、先駆けて心不全疾患管理の質の向上を目指した取り組みを県と協働で実践して

おり、心不全患者在宅支援体制構築事業の一環として2次医療圏8つの施設と協働し包括的心臓リハビリテーション、心不全増悪・重症化予防への啓発活動（年3回のセミナー）を活発に行っていた。また、病院間での患者情報ツールとして自己管理手帳を活用し急性期を離脱後も、各地域で共通認識された疾患管理が行われていた。

当院でも、高齢心不全増加対策として患者のQOL向上および質管理向上に一步前進となる学びが得られた。今後の心不全チームの展望について発表する。

## 9. 当院で使用している酸素療法器具の紹介

臨床工学技術課 長谷 知哉

### 【はじめに】

酸素療法器具は、①患者の1回換気量以下の酸素ガスを供給する低流量システム、②患者の一回換気量以上の酸素ガスを供給する高流量システム、③呼気の際に酸素をリザーバーバッグ内に貯め、吸気時に貯まった酸素を吸い込むリザーバーシステム、④酸素/空気ブレンドと加温回路を用いて加温加湿された高流量のガスを経鼻カニューラにて供給するハイフローセラピーに分類される。

### 【当院での使用器具】

- ①低流量システム（鼻カニューラ、開放型酸素マスク）
- ②高流量システム（ネブライザー付酸素吸入器）
- ③リザーバーシステム（リザーバー付酸素マスク）
- ④ハイフローセラピー

### 【まとめ】

酸素療法器具は、それぞれ個々の特徴を有している。本来は、低酸素状態の改善を目的とするが、正しいデバイス選択や使用ができていないと合併症や状態悪化を引き起こす恐れがある。そのため、患者に合わせた器具の使い分けを理解し、使用する必要がある。

## 10. 薬剤関連顎骨壊死（MRONJ）について

歯科口腔外科 谷尾 和彦

薬剤関連顎骨壊死MRONJ（medication-related osteonecrosis of the jaw）とは、BP製剤等の骨吸収抑制薬

投与時に、顎骨に発生する骨壊死のことである。

2003年に顎骨壊死が初めて報告され、以来多くの患者を苦しめている疾患である一方、その薬剤は、今や骨粗鬆症・前立腺癌、乳癌等の転移性悪性腫瘍の治療になくはならないものである。MRONJの発症は口腔内環境に大きく起因することが知られており、投与前に口腔内保清の徹底が必須である。口腔環境は大腸と同じ程度の細菌数を有しており、さらにむし歯、歯周病等より、口腔細菌が容易に顎骨へ侵入しやすい状態である。このため骨吸収抑制薬の投与前には歯科での口腔保清、感染を惹起する可能性のある歯牙の処置が必要であり、更には投与中の口腔環境の保全も大変重要である。

MRONJ予防には、薬剤投与前に歯科でのスクリーニングが必須であり、これなくしてこの疾患の予防策はないと言っても過言ではなく、医科歯科連携を進めていく必要がある。

## 11. 「骨粗鬆症治療推進委員会」の立ち上げ

整形外科 岸 隆広

骨粗鬆症を基盤とした骨折は脆弱性骨折と呼ばれ、大腿骨近位部骨折（大腿骨頸部骨折と転子部骨折を合わせたもの）や脊椎圧迫骨折などはADLやQOLを悪化させ、要介護に至る原因となり生命予後も引き下げる。さらに脆弱性骨折の既往があると次の骨折（二次骨折と呼ぶ）を生じるリスクが上昇し「骨折の連鎖」を引き起こすことが言われているにもかかわらず、骨粗鬆症治療が適切に行われていない。世界的には二次骨折を防ぐ取り組みが各国で行われており、日本でも骨粗鬆症患者を対象にしたリエゾンサービスの導入が推奨されている。そこで当院でも大腿骨近位部骨折患者の二次骨折予防を目的とした、多職種で連携した対策チームを結成し、2019年5月からは「骨粗鬆症治療推進委員会」として活動している。医師、歯科医師、看護師、薬剤師、理学療法士、医事課職員がそれぞれの分野で治療に介入し、骨粗鬆症の改善、歯科治療、服薬指導、生活指導、転倒予防、地域連携などを行っている。